

英語における名詞句の指示性と その内部構造について

——the + 固有名詞の文法性の観点からの再考——

増 富 和 浩

1. はじめに
2. 定冠詞の特性と固有名詞との共起関係について
3. 分析の枠組み
4. 分析と提案：the と固有名詞の共起について
5. 理論的・経験的妥当性について
6. まとめ

1. はじめに

英語の冠詞の語法を完全に習得することは日本人には難しく、学習者に正しく指導することにも困難が伴うため、慣用的な用法として理解するように指導されることも少なくないようである。本稿では、そのような冠詞の語法の中で、英語の定冠詞と後続する名詞句の文法性に関して、特に固有名詞との共起関係に注目し、慣用的とされる the の用法の中には統語原理によって説明可能な場合があることを議論する。

固有名詞は、人、場所、事物等に固有の名称を示し、本来1つしかないものである。不定冠詞が付いたり、複数形になったりすることは原則としてない（*a Picasso（人名）、*many Kyotos（地名）など¹⁾）。一方、定冠詞と固有名詞の共起に関しては、文法的な場合（the Beatles（グループ名）など）と非文法的な場合（*the Tom Cruise（人名）など）が観察され、事実は少々複雑である。後者の非文法性に対しては、そもそも固有名詞は特定の「指示対象物」の名称を表しているため、その指示対象物を定冠詞で改めて指示することはできない（あるいは、必要がない）という直感的な説明が可能かもしれない。しかし、前者のような文法的な場合を説明することは一見困難であるように思われる。

本稿では、冠詞と固有名詞の共起関係を考察することで、名詞句の内部構造について新たな指摘が可能となることを論じる²⁾。また、Leu（2015）が提案しているドイツ語などにおける定冠詞に関する統語的な分析を参考にして、定冠詞は、従来その機能とされてきた「定名詞句を形成し指示

対象を指し示す機能」の他に、単に「定」であることを示す指標 (definite marker (以下では DM と略記する)) として機能する場合があることを提案する³⁾。

本稿の主張の概略は以下のとおりである。

- (1) a. 前方照応の the と後方照応の the が導く名詞句の構造は異なる。
- b. 前方照応の the は音形を持たない指示的な形容詞を伴って句を形成し、限定詞句 (Determiner Phrase: DP) の指定部に生起する。この場合、固有名詞との共起は非文法的である。
- c. 後方照応の the は上記の形容詞を伴わず、単独で「定」であることを示す指標 (DM) として機能し、主要部 D に生起する。この場合、固有名詞との共起が可能である。
- d. 名詞句が指示性を持つ場合、DP の上位に指示性に関わる機能範疇 (Referential Phase: RP) が投射される。

また、本稿の構成は以下の通りである。次節では、定冠詞と固有名詞との共起に関する文法性を整理し、それらに関する先行研究として樋口 (2009) の分析を概観する。3 節では、具体的な提案をする準備として、本稿で用いる分析の枠組みを確認する。4 節では、(1) に示した主張を具体的に議論し、冠詞と固有名詞の共起に関する文法性を議論する。5 節では、本稿の提案の妥当性について議論する。6 節では、本稿の議論を簡潔にまとめる。

2. 定冠詞の特性と固有名詞との共起関係について

まず、池内 (1985) によれば、定冠詞を含めた限定詞の分類は次のようである。

- (2)
- | | | | | | |
|--------------|---|-----|------|----------------------------|------------------------|
| 名詞句の
限定表現 | { | 指示詞 | 定 : | { | 定冠詞 (the) |
| | | | | | 指示形容詞 (this, that...) |
| | | | | | 所有形容詞 (my, his...) |
| | | | 不定 : | { | 不定冠詞 (a/an, Ø) |
| | | | | | 疑問形容詞 (what, which...) |
| | | | 数量詞 | (two, three, some, any...) | |

池内 (1985) は、名詞句に生起する限定表現について包括的に議論しており、数量詞と指示詞を区別し、指示詞をさらに定と不定とに分類している⁴⁾。ここで注目すべき点は、the が指示形容詞や所有形容詞と同じグループに分類されていることである。ただし、固有名詞との共起に関しては、the とその他の定指示詞とは異なっており、指示形容詞と所有形容詞は、固有名詞とは共起

できないが、すでに確認したように、the の場合は固有名詞の種類によって文法性が曖昧である⁵⁾。

- (3) a. *the/*this/*that/*his John Smith
 [+R]_{1/2} [+R]₁
 b. the/*this/*that/*his Japan Sea
 [+R]_{1/2} [+R]₁

(3a) の非文法的な場合に対しては、冒頭でも触れたように、固有名詞がすでに指示対象を持っている ([+R(eferential)]) にもかかわらず、それをさらに定指示詞で重ねて指示対象を示すのは余剰的で認められない (*[+R]₁ × [+R]₁) し、仮にそれぞれが別の指示対象を示すのであれば、指示性の衝突が生じて正しい解釈ができない (*[+R]₁ × [+R]₂) からであると記述的・直感的には説明できるであろう⁶⁾。ただし、どのような仕組みで指示性の衝突などが生じているかについては、さらに説明が必要であろう。一方、定冠詞には (3b) のような固有名詞との共起が許される場合があることをどう説明するかが重要である。

ここで、学校文法でもしばしば取り上げられる定冠詞と固有名詞の共起が文法的となる場合を簡単に整理しておくことにする。(以下の用例は、豊永 (2009) から引用したものである。)

- (4) a. the Pacific (Ocean) , the Panama Canal... (海洋・河川・運河)⁷⁾
 b. the Mayflower, the Baltic Squadron... (船舶・艦隊)
 c. the Straits of Dover , the Crimea (Peninsula)... (海峡・半島)
 d. the Alps, the Marianas... (山脈・群島)
 e. the Gobi (Desert)... (砂漠)
 f. the British Museum, the Metropolitan Opera House... (公共建築物)
 g. the New York Times, the Times... (新聞・雑誌)
 h. the Liberal Party, the Red Cross... (団体名)

樋口 (2009) は定冠詞と後続する名詞の共起関係について、「同定可能性」の点から議論しており、話題になっている名詞が聞き手に同定可能であると話し手が予測するときに the が用いられると説明している。さらに、the と固有名詞の共起が可能かどうかに関しては、原則的に固有名詞の知名度と関係しており、大規模な指示対象を示す固有名詞は多くの人に同定可能であるので the が付き、小規模な指示対象を示す固有名詞はその地域の人以外には同定不可能なので the が付かないと分析している。このような分析を用いて、例えば (4a) の the Pacific Ocean は規模が大きく知名度が高いので、the を伴うことが可能であるが、湖や池の場合には、水の広がりという点では同じであっても地元民以外には同定不可能なので the が付かない (Skelton Lake (Minnesota 州) など) と論じている。樋口 (2009) の議論は、(4) の例を単純に慣用的と結論付けることに比べれば、一定の規則に従った説明であると言えるだろう。

一方で、樋口の説明では the の機能に関する統語的側面が一切議論されていない点には疑問が残る。例えば、(5a) の例が示すように、人名を表す固有名詞は本来 the と共起できないが、(5c) の下線で示したような修飾語句を伴い、the が後方照応的に用いられる場合には、the との共起が可能となる点は興味深い⁸⁾。

- (5) a. Bill Clinton was elected President of the United States in 1993. (cf. 新英和大辞典)
b. *The Clinton I know is the Clinton I show in this book.* (cf. 樋口 (2009: 177))
(私が知っているクリントンは本書で示しているクリントンだ。)

もちろん、the と固有名詞の共起関係をすべて統語的に説明することは困難であり、樋口 (2009) などが指摘するように、多くの場合は意味論的・語用論的に説明されるべきであろう。しかし、(5) のような例が示すように、新たな統語構成物が加わることで文法性が変化する場合については、統語的な要因が関与する余地があると考えられる。そこで、本稿の議論では他言語の現象なども踏まえて、定冠詞と固有名詞の共起に関する文法性には定名詞句の統語特性が関わる場合があることを議論することにする。

3. 分析の枠組み

本節では、本稿の議論で用いるミニマリスト・プログラム (cf. Chomsky (2000, 2001, 2008) など) の提案に基づく分析の枠組みについて確認しておくことにする。

3.1. 名詞句における一致現象と内部構造について

生成文法においては、節と名詞句の内部構造を並行的に議論することが多いが、構造を派生する過程における統語操作についても並行的に議論することができる。例えば、(6a) は節内における主語と動詞の形態的な一致現象を示しているが、このような形態的な一致現象は、(6b) に示すように名詞句においても観察される。

- (6) a. He *run/runs in the park every day.
b. this book/*books

このような一致現象は節の派生においては Agree (一致操作) (cf. Chomsky (2000, 2001, 2008) など) により説明されている⁹⁾。

- (7) a. [_{TP} T [_{VP} he run ...]]
 [_{uφ}] [φ], [_{Case}]
 └────────┘ Agree
- b. [_{DP} this D [_{NP} book]]
 [_{uφ}] [φ], [_{uF}]
 └────────┘ Agree

Agree とは、言語表現における形態的な一致関係を説明するメカニズムであり、Agree が成立した結果、動詞の形態や名詞句の数の形態が保証される。Agree を用いた分析では、派生が収束する（文法的となる）ためには、ある解釈不可能な素性（uninterpretable feature: [uF]）が、構造上もつとも近い位置にある符合する（マッチングする）解釈可能な素性との Agree により、照合（checking）・削除（deletion）されなければならないとされている。例えば、(7a) においては、時制を表す機能範疇 T (tense) に「人称・性・数」に関する解釈不可能な φ 素性（[uφ]）が存在するため、この素性が he の持つ解釈可能な φ 素性（[φ]）との Agree により、照合・削除されることで派生が収束する。なお、Chomsky（2001）の定義では、Agree が適用される両方の要素が解釈不可能な素性を持つ（アクティブ（active）である）必要があるが、格素性（[Case]）が解釈不可能とされているため、(7a) の he もアクティブであり、主格の認可については、[uφ] の照合・削除に付随して行われると分析されている。

このような分析は、本稿で議論する名詞句の一致現象にも拡張可能である。すなわち、(7b) では、[uφ] を持つ DP（限定詞句）の主要部 D と、[φ] を持つ NP の主要部 book とに Agree が適用されることにより、形態的な一致が this book として正しく具現化される。なお、すでに述べたように、(7b) において Agree が成立するためには、book にも解釈不可能な素性が必要であるが、この素性が具体的にどのような素性であるかは検討の余地があり、本稿の議論に限った問題ではないので、ここでは単に [uF] としておくことにする。

次に、TP、DP よりも上位の構造について確認する。まず、節構造には TP 投射の上に、節のタイプを表す投射 CP（complementizer phrase）が想定されており、派生により形成された節が、平叙文であるのか疑問文であるのかなどを示す機能があるとされている。ミニマリスト・プログラムの枠組みでは、この節タイプの決定過程も Agree により説明されている。例えば、(8a) に示す疑問文の場合、CP の主要部が解釈不可能な疑問素性 [uQ] を持ち、それとマッチングする解釈可能素性 [+Q] を持つ wh 句との間に Agree が適用される。このとき、what は解釈不可能な [uw] を持ちアクティブである。Agree の結果、解釈不可能な [uQ] と [uw] が照合・削除され、問題となる節が疑問文として正しく認可されると分析されている¹⁰⁾。

- (8) a. What did you eat?
b. [_{CP} did-C [_{TP} you [_{VP} eat what]]]
{uQ} [+ Q]{uw}h
| | Agree

本稿では、節の場合と並行的に、名詞句においても DP 投射の上に、名詞句のタイプ、例えば、指示的であるかどうかを示す投射 RP (referential phrase) が想定できると仮定し、形成された名詞句の指示性が決定される過程も Agree により説明できることを提案する。具体的には、(7b) の後の段階を示した (9) の構造において、RP の主要部 R は指示性に関わる解釈不可能な素性 [uR] を持ち、指示性のある this は解釈可能な [+R] を持つと仮定する。このとき、this が持つ解釈不可能な [uref] は、(8) において Chomsky などが疑問文の派生で仮定している [uwh] に対応している。本稿では、この構造に Agree が適用された結果、R の [uR] が照合・削除され、これに付随して this の [uref] も照合・削除されることにより、this book が指示的な名詞句として認可されるという説明が可能であると分析する。

- (9) [_{RP} R [_{DP} this D [_{NP} book]]]
 [+uR] [+R][+uref]
 | _____ | Agree

3.2. 前方照応の the と後方照応の the が形成する構造について

定冠詞と固有名詞が共起する場合の文法性を統語的に議論するために、他の言語の定冠詞の特性に関する Leu (2015) の分析についても概観しておくことにする。Leu (2015) はドイツ語やノルウェー語などの名詞句における定冠詞の特性について統語的な観点から分析している。

- (10) a. der Tisch German
 the table
 b. der Tisch (下線は強勢があることを示す。)
 that table

ドイツ語の定冠詞 *der* は (10a) のように強勢を伴わない場合、名詞句全体の解釈は、単にその名詞句が「定」であることを示す解釈 (Leu (2015) では 'plain definite') であるが、(10b) のように *der* に強勢が置かれた場合の定名詞句の解釈は指示的であると指摘している。つまり、見かけ上は同じ定名詞句に 2 通りの解釈が生じるわけであるが、Leu (2015) はこの理由について、他の言語の例を含めて統語的な要因を議論している。

- (11) a. hus-et (定の解釈) Norwegian
house-DEF
b. de-t svarte hus-et (定および指示的な解釈)
that/the black house-DEF
c. de-t hus-et (指示的な解釈)
that house-DEF

ノルウェー語では、(11a) の例が示すように、単なる定の解釈の場合には、名詞の前には定性を示す指標 (definite marker: DM) がなく、名詞の語末に定性を示す接辞-et を伴う。一方、(11b) のように名詞が形容詞を伴う場合には、必ず DM として定冠詞が生じ、名詞句全体は定の解釈と共に指示的な解釈を受けることが可能となる¹¹⁾。興味深いのは (11c) の場合で、名詞の前後に DM と定性を示す接辞を伴うが、形容詞が生起しない場合には、名詞句全体の解釈は義務的に指示的な解釈となる。

さらに、スイスドイツ語では、定の解釈が与えられる (12a) の場合には、名詞の前に DM として定冠詞が生じるが、屈折接辞が付かない (Ø は接辞が付かないことを示す)。一方、形容詞を伴う (12b) の場合、DM には必ず屈折接辞が付かなければならない。ここでも興味深いのは、(12c) の例で、顕在的な形容詞が生起していないにもかかわらず、DM に屈折接辞が生じており、この場合の名詞句全体の解釈は指示的であることである。

- (12) a. dØ rosä (定の解釈) Swiss German
the rose
b. d-i rot rosä (定の解釈)
the red rose
c. d-i rosä (指示的な解釈)
this rose

これらの事実から、Leu (2015) は、ノルウェー語やスイスドイツ語における名詞句の指示性に関する定冠詞と形容詞の関係に注目して、(11c)、(12c) のような指示的な解釈が義務的となる名詞句には、顕在化していないが、名詞の前に音形のない指示的・直示的な形容詞 (ノルウェー語については (13a) の THERE で示した部分) が生じており、このような形容詞と det や di の解釈を合成した結果、指示性が得られると分析している。このことから類推して、ドイツ語の場合にも同様の分析が可能であると Leu は指摘している。つまり、(10b) の der Tisch の解釈が指示的である場合にも、(13b) に示すように、der の後には音形のない直示的な形容詞が生起すると分析している。また、これらの指示的に解釈される名詞句の構造を (14) のように提案している。(14) の構造では、定冠詞と音形のない形容詞が句を形成し、DP の指定部に生起している。

- (17) a. I met *a Tom Cruise (人名) in the museum.
 b. I want to be a Tom Cruise (= a famous actor like Tom Cruise).

前節で指摘した名詞句の派生に従えば、(17a) の派生は (18) のように考えることができる。(18) の構造においては、DP 分析 (cf. Abney (1987) など) の一般的な仮定に従い、不定冠詞は主要部 D に生起している。 ϕ 素性に関して、不定名詞は語彙特性上「数」について「単数」が指定されていると考えられるので、 $[\text{u}\phi]_{\text{singular}}$ で示している。一方、固有名詞は不可算名詞であるので、 $[\phi]_{\text{uncountable}}$ で示している¹²⁾。前節で議論したように、この構造において、主要部 D (すなわち、不定冠詞) と Tom Cruise は Agree によりお互いの解釈不可能素性を照合・削除しなければならないが、 $[\text{u}\phi]_{\text{sg}}$ と $[\phi]_{\text{uc}}$ とがマッチングしないため、Agree が成立せず、結果として派生が非文法的になると考えられる。

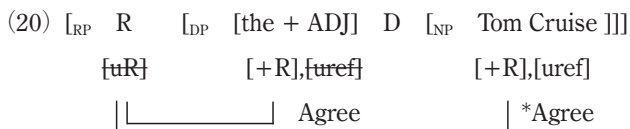
- (18) $[\text{DP} \quad [\text{D} \text{ a}] \quad [\text{NP} \quad \text{Tom Cruise}]]$
 $[\text{u}\phi]_{\text{sg}} \quad [\phi]_{\text{uc}}, [\text{uF}]$
 | *Agree

このような分析は、学校文法などで「固有名詞は不可算名詞であるので、可算名詞の単数形にのみ用いられる不定冠詞とは共起できない」とする経験的な説明を、本稿で提案する枠組みで統語原理により説明できることを示したものである。

次に、(19a) のような前方照応の the と固有名詞が共起できない理由について議論するが、この場合は、(18) の説明とは異なると考えられる。なぜならば、(19b) の派生構造が示すように、D の ϕ 素性は「単数」の指定を受けていない $[\phi]$ であるので、the と Tom Cruise の間で Agree が成立し、この段階では (19) の派生は文法的と判断できる。なお、前方照応の the の場合に関する (16b) に従い、(19b) では the は音形のない形容詞と句を形成し DP の指定部に生起している。

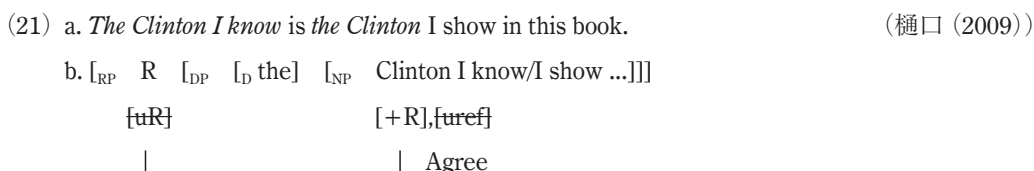
- (19) a. *The Tom Cruise is one of the most famous actors in the world.
 b. $[\text{DP} \quad [\text{the} + \text{ADJ}] \quad \text{D} \quad [\text{NP} \quad \text{Tom Cruise}]]...$
 $\{\text{u}\phi\} \quad [\phi], \{\text{uF}\}$
 | Agree

従って、(19a) が非文法的になる理由はこの後の派生の段階にあり、前節の議論に従えば、その構造は (20) のようである (cf. (9) および (16b))。なお、(20) では、説明を簡潔にするために、(19) においてすでに議論した素性は省略し、問題となる素性についてのみ示している。

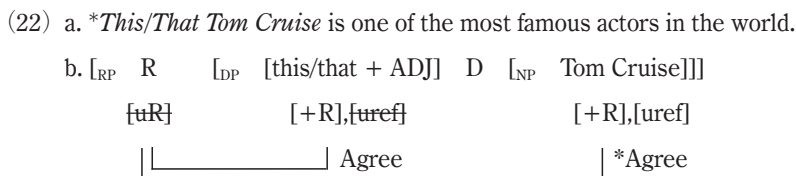


(20) では、主要部 R の解釈不可能な [uR] が Agree により照合・削除されなければならないが、構造上最も近い位置にある [+R] は [the + ADJ] が持つので、両者の間で Agree が成立し、それぞれの [uR] と [uref] が照合・削除される。しかし、固有名詞 Tom Cruise が持つ解釈不可能な [uref] は、Agree に参加できないため、照合・削除されずに残り、結果として、(20) の派生（すなわち、(19a) が示す前方照応の the と固有名詞の共起）は非文法的であると説明される¹³⁾。

一方、後方照応の the と固有名詞が共起する (21) のような場合については、the 自体には指示性がないため、(18) で示した不定冠詞の場合と同様に、the は単独で主要部 D に生じし [+R] も持たない。これにより、主要部 R と Clinton の Agree が成立し、それぞれの解釈不可能素性が照合・削除され文法的であると説明できる。なお、(21) においても (20) と同様に問題となる素性についてのみ示してある。



以上のように、本稿が提案する分析を用いることで、the と固有名詞の共起に関する文法性の一部は統語原理により説明することが可能となる。なお、(22)に示すように、本稿の分析は、前方照応の the と同様に（前方照応的な）指示性を持つ this や that などの場合にも拡張可能であることを指摘しておきたい。



5. 理論的・経験的妥当性について

本節では、本稿の議論の妥当性を検証するために、前節で示した分析に対する理論的・経験的な論拠について確認しておくことにする。本稿の提案では、次に示す二点を重要な仮定として用いているので、これらに対する妥当性について検討する。

- (23) a. 前方照応の *the* や *this/that* などの定指示詞は、音形のない形容詞 (ADJ) と句を形成し、後続する名詞に指示性を与えている。
 b. 後方照応の *the* は指示性を持たず、単に定性の指標 (DM) として機能する。

まず、(23a) についてであるが、名詞句の中に ADJ のような音形のない要素を想定する根拠の 1 つとして、3 節で示したドイツ語などの分析 (Leu (2015)) に基づく言語普遍性の観点が考えられるが、その他に、次のような例からも理論的・経験的根拠が得られる。(24) は学校文法において「*the* + 形容詞・分詞」と呼ばれている用法である。

- (24) a. *the rich/poor* (PEOPLE)
 b. *the predictable* (THINGS/EVENTS) (樋口(2009))

これらの表現が文法的であると説明するためには、統語的には主要部となる名詞が必要であるし、解釈にもそれは反映されており、形容詞・分詞の後に通例「人々」や「物事・出来事」などの音形のない名詞（すなわち、PEOPLE や THINGS/EVENTS など）を補足した解釈が必要である。また、文脈に依存した他の名詞の解釈を補うことも可能である。さらに、次の例が示すように、「*the* + 形容詞・分詞」は、後続する動詞との間に形態的な一致を示すし (cf. (25a))、他動詞の目的語としても機能し (cf. (25b))、後続する前置詞句や関係節に修飾されることも可能である (cf. (25b, c))。これらの事実は、*the* + 形容詞・分詞の後に音形のない名詞を補う必要性を示唆しており、定名詞句の中に ADJ などの音形のない要素を想定することに理論的・経験的根拠を与えられ¹⁴⁾。

- (25) a. *The accused* was/were acquitted of the charge. (樋口(2009))
 b. I don't like *the white* of an egg. (増富(2012))
 c. It is important to support *the old* who are alone. (ibid.)

最後に、(23b) に関わる論拠を議論することにする。本稿では、*the* と固有名詞の共起が可能である場合を説明するために、*the* が単に定性の指標 (DM) としてのみ機能できることを指摘したが、この用法は固有名詞とは無関係な文脈でも想定されることが、(26) の例から確認できる。(26a–c) は存在構文に定名詞句が生起している例であるが、存在構文には談話中で言及されていない新情報しか生起できず、前方照応の *the* は旧情報を示すので、(26a) のような例は非文法的（すなわち、「定性制約」に対する違反する）とされている。一方で、(26b, c) の例が示すように存在構文に *the* を伴う名詞句が生起できるとされる例が観察されている。これらの例は、本稿が提案するように、*the* が DM としてのみ機能し、指示性のない *the* が存在することを示しており、(23b) に対する経験的論拠を示していると考えられる¹⁵⁾。

- (26) a. There's a/*the woman in the house. (池内(1985))
 b. In England there was never the problem that there was in America. (Perlmutter(1970))
 c. There was the vigor of a young man in his step. (Woisetschlaeger(1983))

6. まとめ

本稿では、the と固有名詞の共起関係について統語論の観点から考察した。議論の過程で、the に導かれた名詞句には、the の用法が前方照応であるか後方照応であるかによって、二種類の派生過程が想定可能であることを指摘した。議論の結果、従来の学校文法などで「慣用的」と説明される冠詞の用例の中にも、統語原理に基づいた説明が可能な場合があることを示した。

注

- ただし、次のような例は、固有名詞が普通名詞に転用されているとされる例で文法的である。なお、本稿の用例につけた*は、その用例が非文法的であることを示している。
 - There is a Picasso on the wall. (壁にピカソの絵が掛けてある。)
 - There are many Kyotos in Japan. (日本には京都のような場所(古都)がたくさんある。)
- Chomsky (1970) 以降、The enemy destroyed the city や the enemy's destruction of the city などに見られる意味的・統語的な類似性を基に、節と名詞句の内部構造とその派生過程を並行的に議論できることが指摘されている。
- 言い換えると、本稿では、the には先行文脈における具体的な指示対象を示す場合と、そのような具体的な指示対象を示さない場合の2通りの用法があるということを他の言語の用例なども踏まえて主張する。また、詳細は以下で議論するが、本稿の提案では、指示性を持つ場合に関して、this や that などの指示形容詞と同様の分析が可能であることを示す。
- 池内(1985)は数量詞を、その特性・用法の違いにより、さらに3種類に分類しているが、本稿の議論には直接関係しないため、紙面の都合上その点は省略することにする。
- また、不定冠詞と固有名詞の共起も不可能である点については後の議論を参照。
- [+R]に付けた下付き数字1および2は指示対象の同異を示す指標として使用している。
- カッコ内は固有名詞の指示対象の種類を示す。
- 後方照応の場合、the 自体に指示性はなく、名詞に後続する修飾語句による限定の結果、指示対象が同定可能となる。(cf. 池内(1985: 123))
- Agreeの技術の詳細については、Chomsky (2000, 2001, 2008)などを参照。
- さらに技術的な詳細については、Chomsky (2000)などを参照のこと。
- (11b, c)における定冠詞 det の表記に関して、-t の部分は屈折接辞を示す。
- さらに言えば、固有名詞はその他の名詞とは異なり、内包を持たず外延のみを持つという特性があるので、 φ 素性を明確に指定できない可能性もあるので、 $[\varphi]_{\text{defective}}$ とすべきかもしれない。ただし、いずれにしても $[\text{u}\varphi]_{\text{singular}}$ とはミスマッチを生じ、Agree が成立しないと考えられる。
- Chomsky (2001)によれば、このような現象は欠如要素介入制約 (Defective Intervention Constraint: DIC) の違反として説明されるが、本稿の議論に影響を及ぼさない限り、この点には立ち入らないことにする。

- 14) ちなみに、ノルウェー語などの口語表現においては、本稿で仮定している音形のない形容詞 THERE などが顕在的に具現化する場合（下線部）が観察される（cf. (11c)）。

- 15) 口語に限られるとされるが、**this** にも弱い指示性の用法があると考えられる例が観察されている。このような場合にも、本稿の提案では、**this** の後に音形を持たない直示的な形容詞が生起していないため、通例は定性制約により排除される **this** が存在構文に生起できていると予測できる。

参考文献

辞書等

On the Referentiality of English Noun Phrases and their Internal Structure

—A Reconsideration from the Grammaticality of
the + Proper Nouns—

MASUTOMI Kazuhiro

In this paper, I will examine the relation between the grammaticality of *the* + proper nouns (e.g. **the Picasso* or *the Clinton I know*) and their internal structure in terms of the Minimalist Program proposed by Chomsky (2000, 20001, 2008 and so on). Under DP Analysis (cf. Abney (1987)), it is basically assumed that English determiner *the* occurs in the head position of DP (determiner phrase). However, for the correct analysis of the behavior of *the* + proper nouns, I will point out the possibility of another structural position which the determiner *the* occupies. In the course of the discussion, I will take a closer look at the syntactic properties of *the* and proper nouns, focusing on their derivational processes. I will then show that the structural positions of *the* play an important role in predicting the grammaticality of *the* + proper nouns. Such an analysis should have some implication for the syntactic theory of noun phrases or DP structure.